

お盆雑考

宮坂 宥 洪

1.

お盆は正月と並んで日本を代表する民俗行事であるが、一般に基本的には仏教の行事であると考えられている。^①

お盆とは何か。『広辞苑』第七版^②によると、次の通り。

ぼん【盆】①平たい瓦器（がき）。②木・金属などで作った、浅く平たい、ものを載せる道具。③盂蘭盆の略。盂蘭盆の前後数日の称。（以下略）

この三番目の「盂蘭盆の略」が該当すると思われるが、では、盂蘭盆とは何か。

うらばん【盂蘭盆】（梵語 ullambana 倒懸と訳され、逆さ吊りの苦しみの意とされるが、異説もある）盂蘭盆經の目連説話もくれんに基づき、祖霊を死後の苦しみの世界から救済するための仏事。

文中の「異説もある」という箇所は、同辞典の第六版までは、「イランの語系で靈魂の意の *miran* とする説もある」とあった。この説が退けられたのはなぜだろうか。

さて、盂蘭盆は「祖霊を死後の苦しみの世界から救済するための仏事」とある。

それは盂蘭盆經(3)の目連説話に基づいているというが、わが国の民俗行事としてのお盆は、それとは違うように思う。また、盂蘭盆の原語は梵語 *ullambana* であり、その意味は「倒懸」、すなわち「逆さ吊りの苦しみ」をさすというが、これもわが国の民俗行事としてのお盆とは何の関係もないように思う。

近年、辛嶋静志は、「盂蘭盆」は「ご飯をいれた鉢」を意味し、よって『盂蘭盆經』は「（お供えの）ご飯をいれた鉢の經」の意味であるという説を発表した。(4)これによると、盂蘭盆会とは、「ご飯をいれた鉢を供える法会」のことであり、つまり、飲食物等の供物をお盆（リトレイ）に載せて、自恣の行事に参加するために十方からきた僧侶たちに布施する催しということである。

辛嶋はまた『大法輪』誌に『盂蘭盆』の本当の意味「千四百年間の誤解を解く」と題した同じ内容の論文(5)を寄稿しているが、果たして日本人は一千年以上も、盂蘭盆の意味を誤解してきたのだろうか。

2.

お盆の「盆」が「盂蘭盆」の略であり、盂蘭盆の典拠は『盂蘭盆經』であり、『盂蘭盆經』に基づいて盂蘭盆

会なる法会が中国でも日本でも行われてきたということは疑いようのない事実である。

問題は、「盂蘭盆」という語の意味である。玄奘が唐の太宗皇帝の勅により六四八年（貞観二二）頃に撰した『一切経音義』（全二十五卷）において、「盂蘭盆」について次のように記して以来、「盂蘭盆」は梵語（または西域の言語）の音写で、意味は「倒懸」という解釈が広まった。

盂蘭盆、此の言は訛なり。正しくは烏藍婆拏うらんばなと云う。此の訳を倒懸とうけんと云う。西国の法を案するに、衆僧自恣の日に至って、先亡罪有り、家また嗣を絶ち、また人の饗祭する無ければ、則ち鬼趣の中に倒懸の苦を受く。仏三宝田中に俱具せしめ、仏僧に施し奉り、先亡を祐資して、以て先を救う。倒懸飢餓の苦と云う。旧に盂蘭盆は是れ貯食の器と云うは、此の言は誤りなり。⁶

この最後に「旧に盂蘭盆は是れ貯食の器と云うは、此の言は誤りなり」と記しているのは、盂蘭盆は飲食物等載せる容器（トレイ）の意味ではないと殊更に念を押しているかのようである。だが、『盂蘭盆経』の中の「盂蘭盆」は、後述する通り、まぎれもなく「飲食物等載せる容器（トレイ）」を意味する語なのである。

玄奘の時代には既に盂蘭盆会は広く行われていた。それが『盂蘭盆経』に基づいて行われているということも知られていた。だが、玄奘は、盂蘭盆とは飲食物等載せる容器（トレイ）のことだとする当時の一般常識を退け、「盂蘭盆」という、このいかにも音写語らしい語の原語を詮索し、「正しくは烏藍婆拏と云う。此の訳を倒懸と云う」と記した。つまり、『盂蘭盆経』に記されている「盂蘭盆」の語の用法は間違っていると判断したわけである。

しかし、「盂蘭盆」は、玄応が『盂蘭盆經』の中から選んだ語なのであり、今も昔も「盂蘭盆」の語の典拠を『盂蘭盆經』以外のいかなる文献にも求めることはできない。そうである以上、「盂蘭盆」の意味は『盂蘭盆經』に記されている通りに理解するほかはないはずなのである。それにもかかわらず、『盂蘭盆經』に記されている「盂蘭盆」の語の用法は間違っているとは一体どうした見かと言わざるをえないが、八〇七年（元和二）に慧琳が著した『一切経音義』（全百卷）には玄応説がそのまま採録されている。また一一四三年（紹興十三）に法雲が撰述した『翻訳名義集』でもそれは踏襲されている。⁷「盂蘭盆は倒懸の義」とする解釈は伝統として定着したのである。

かくして、盂蘭盆会とは、玄応の解釈にしたがい、衆僧自恣の日に、仏僧に施し奉り、先亡の倒懸の苦を救う法会、ということになったのである。

3.

玄応の言うように、西国すなわちインドには、子孫のない先祖は餓鬼になって倒懸の苦しみに陥るといふ言い伝えがあった。⁸大叙事詩『マハーバーラタ』に「倒懸」を意味する梵語の動詞形 *avalambate* があり、その名詞形 *avalambana* から *ullambana* という語形が導き出される (*avalambana* → *olambana* → *ullambana*)⁹ ことから、近年まで、玄応のいう「烏藍婆拏」という表記から還元される *ullambana* が「盂蘭盆」の原語とされてきた。現在でも、あたかもこれが定説であるかのように『広辞苑』に記載されている。

だが、*ullambana* はあくまでも想定された語にすぎず、実際には、いかなる梵語文献にも見られない語なのである。

そこで、「孟蘭盆」の原語は、梵語ではなく、イラン語の「ウルヴァン」の音写ではないかと考え主張したのが岩本裕であった。¹⁰『広辞苑』第六版まで「イランの語系で靈魂の意の *urvan* とする説もある」とあったのがそれである。同辞典第七版でこの説明文は消え、「異説もある」となった。

どのような異説があるというのであろうか。先行研究を大別すると二種類あつて、一つは、玄応説と同様、「孟蘭盆」は音写語であつて、その原語があるとする説である。近代仏教学の草分けである南條文雄¹¹、池田澄達¹²、荻原雲来¹³らは、玄応のいう「烏藍婆拏」という表記から還元される *ulambana* が原語であるとした。また、高楠順次郎¹⁴や干潟龍祥¹⁴は「救済」を意味する *ullumpana* が原語であるとした。そして、これらを否定して、岩本はイラン語系のソグド語 *urvan* が原語であるとしたのであつた。井本英一¹⁵は中期イラン語の *ulavan* の音写と考えられるとしている。

一方で、玄応が俗説として否定した「孟蘭盆は器（トレイ）」を認めるのは、入澤崇¹⁶や田中文雄¹⁷、そして前掲の辛嶋である。厳密に言うと、『孟蘭盆経』の中の「盆」という語は梵語ではなく、「器（トレイ）」の意味の漢語であるという説である。

では「孟蘭」は何かというところ、これを明らかにしたのが前掲の辛嶋である。「孟蘭」は梵語 *odana*（米飯）の口語形 *odana* の音写の可能性があったとした。辛嶋が「千四百年間の誤解を解く」とまで言っているのは、このことである。また藤本晃¹⁸は「盆」はお布施する食べ物や衣服を載せるお供え盆のことであるとした上で、「孟蘭」は屋根や床がついた御布施用の仮殿の意の「干蘭」の誤記と考えられるとしている。

4.

まず、「孟蘭盆」という語がいつどのようにして生まれたかであるが、とにもかくにもこの語の初出は『孟蘭盆經』である。この經は西晋の武帝の時代（二六五～二九〇）に竺法護（二三九～三一六）が訳したとされている。だが、それは随代の『歴代三宝紀』¹⁹（五九七）や唐代の『開元釈教録』²⁰（七三〇）などの説で、梁の天監年間（五〇二～五一九）に撰述された最古の經録『出三藏記集』²¹では訳者不明とされていた。

六世紀初頭の經録では訳者不明とされていたのに、六世紀末の經録から竺法護訳と明記されるようになったのはなぜか。

梁の大同四年（五三八）に孟蘭盆會が行われているのである。南宋代の咸淳四年（一二六九）に天台宗の志磐によって撰述された『仏祖統紀』卷三七に、

大同四年。帝、同泰寺に幸し孟蘭盆齋を設ける。²²

という記述がある。これが中国における孟蘭盆會の始まりであるとされている。

なお、『日本書紀』卷二二、推古天皇十四年（六〇六）の条に、

是の年より初めて寺毎に、四月の八日、七月十五日に齋を設ける。²³

という記述があり、これが日本における灌仏會と孟蘭盆會の始まりであるとされている。

但し、「孟蘭盆會」という語の初出は、齊明天皇三年（六五七）の条の、

辛丑（七月十五日）に須弥山の像を飛鳥寺の西に作る。また、孟蘭盆會設く²⁴

である。また、齊明天皇五年（六五九）の条に、

庚寅（＝七月十五日）に群臣に詔して、京内の諸寺に孟蘭盆經を勸講とかして、七世の父母を報といしむ。²⁵とある。

梁代に勅命により「孟蘭盆会（齋）」と称する行事が初めて催されるに当たり、その典拠となる『孟蘭盆經』が訳者不明では困るわけで、鳩摩羅什が登場するまで当代随一の大翻訳家として著名な竺法護の訳との確定がなされたのではないかと考えられるのである。

従来、わが国でこの經典は偽經と見做されてきた。梵語原典がなく、チベット語訳もないことに加えて、「道眼」²⁶「孝順」といった仏教的ではない表現がみられることから、中国で偽造された經典と見做されてきたのである。

だが、鳩摩羅什以前の翻訳經典には「道眼」「孝順」等の表現が数多く見られるし、このほか古い漢訳仏典の用法が『孟蘭盆經』にはあるとして、この經典は決して偽經ではなく、三、四世紀に、竺法護か誰かによって、インドの原典から訳された經典である、と初めて明言したのも辛嶋である。

もしそれが正しいとすれば、その『孟蘭盆經』によって、三、四世紀に中国では「孟蘭盆」という言葉が知られていたことになる。

しかし、それから孟蘭盆会が初めて行われるまでに二百数十年もの隔たりがあるのはいかにも不自然な気がする。というのも、『孟蘭盆經』は、まさしく「衆僧自恣の日に、仏僧に施し奉る」行事の意義と実践を説いた經典であって、あたかも孟蘭盆会という行事を行うために編まれた經典ではないかとさえ思えるからである。

それに、先述の訳者不明としていた六世紀初頭の経録には実は『孟蘭盆經』と記されていた。『孟蘭盆經』という経名は、六世紀末の経録に初めて登場するのである。本当に竺法護という著名な翻訳家が『孟蘭盆經』という名称の經典を訳していたのなら、このようなことはありえない。

東晋(三一七—四二〇)の時代の失訳とされる『報恩奉益經』という經典がある。『孟蘭盆經』の表現や語句をほとんどそのまま使いつつ、『孟蘭盆經』を三分の一ほどに短縮した經典である。ただしこれは『孟蘭盆經』が先行經典という前提の話であって、この前提を外せば、『孟蘭盆經』は『報恩奉益經』を増広した經典という可能性が高い。というのも、この經典には「孟蘭盆」という語が一度も登場しないからである。

また、梁の時代の天監七年(五〇八)に勅命によって僧旻が撰集し、再度勅命によって天監十五年(五一六)に宝唱が中心となって撰した一種の百科事典である『経律異相』(全五〇卷)の卷十四に「目連為母造盆」という項の記述がある。これは『報恩奉益經』を更に半分に縮めたものとなっている。だから、『報恩奉益經』を典拠として記したものかと思いきや、その出典は『孟蘭盆』となっている。この文献にも「孟蘭盆」という語が登場しないから、その出典となる經典にも「孟蘭盆」の語はなかったであろう。

これを要するに、『孟蘭經』なる經典がいかなる經典であろうとなかろうと、『経律異相』が著された時点で、『孟蘭盆經』という名称の經典はまだなく、「孟蘭盆」という言葉も知られていなかったということである。なぜなら、『孟蘭盆經』のキーワードは何を差し置いても経題の「孟蘭盆」にほかならず、この經典を短縮もしくは要約したかのような文献にこのキーワードが用いられていないはずがないからである。

以上のことから、『孟蘭盆經』は、『経律異相』が著された五一六年から、初めて孟蘭盆会が行われた五三八年の間に成立した可能性が高い。この時、初めて「孟蘭盆」という言葉が生まれたのである。

梁の宗懐が六世紀半ば頃に著した『荆楚歲時記』には、はや「七月十五日、僧尼道俗、悉く盆を営み諸仙に供す」として『孟蘭盆經』の内容が具に紹介されている。

次に、ここで『孟蘭盆経』の内容について検討しておきたい。

この經典の主人公は釈尊の弟子の中でも神通第一と称された目連尊者である。まさしく、この經典は三幕からなる演劇の脚本そのものと言って過言ではない。その三幕すべてに登場する目連尊者の役回りは実に意外としか言いようがない。

第一幕は、神通力を得た目連が両親を仏の道に導こうとして道眼をもって世を見る。すると亡くなった母は餓鬼の世界にいた。飲み物や食べ物もなく、骨と皮ばかりに痩せ衰えて骨が浮き上がっているのがみえた。嘆き悲しんだ目連は、そこに赴き、鉢にご飯を盛って差し出すが、母がそれを口に入れる前に化して炭となり、ついには口に入れることは出来ない。目連、大いに叫び、悲号啼泣して、助けを求めて仏のもとに馳せ参ずる。

神通力を得たほどの目連が、たとえどのような悲惨な状況を目前にしようと、「大いに叫び、悲号啼泣」するようなことがあるだろうかとの疑問が湧くが、これがこの經典における目連の役回りである。神通力と悟りとは関係がないのかもしれない。

なぜ目連の母は餓鬼の世界にいたか。これは第二幕で釈尊が明らかにすることだが、それは「汝が母は罪根深く結せり」ということであつた。目連の母にどのような罪があつたかについて経は何も語っていない。

パトリ小部經典『ペータヴァツツ（餓鬼事経）』という、五十一話からなる「死者たちの物語」²⁹によれば、ここに登場する餓鬼が生前に犯した悪業は主に「物惜しみ」である。それは第三者による善行が廻向されることによつて救われるのだが、その善行とは、ひとえに出家者や教団に対する布施である。なぜ餓鬼に直接施すことが

できないかというところ、餓鬼は阿羅漢のような福田ふくでんではないからとされる。福田（＝阿羅漢）に農夫（＝施主）が蒔いた種（＝施物）が果を産み、その果を餓鬼が享受することができる、という仕組みになっているのである。

仏教が説く自業自得の原則に従うならば、餓鬼道に墮ちた者は、自らの罪を償っているわけであり、それがいきなり保釈されるというようなことは本来ありえない。だが、それを可能とする「廻向」という考え方がない方針は、従来、大乘仏教の「空の思想」によるものと考えられてきたが、既に初期仏典に説かれていたのである。

6.

第二幕は、釈尊のもとに馳せ参じた目連に、仏が懇々と諭す場面である。

お前の母は犯した罪の根が深く張っているので、お前一人の力ではどうすることもできない。神々の力をかりてもダメ。十方衆僧の威神力を用いてこそ可能だと説く。

具体的には、「十方衆僧の、七月十五日の僧自恣の時に、まさに七世の父母及び現在の父母厄難中の者のために、飯百味、五果、汲灌盆器、香油、錠燭、床敷、臥具を具え、世の甘美を尽して、もって盆中に著け、十方の大徳衆僧を供養すべし」と説く。

この文中に、「盆」という語が二回出てくる。最初の「汲灌盆器」は、要は水を汲み灌ぐための容器を意味する。次の「盆中に著け」の「盆」もまた、衆僧に供養する諸々のものを載せる容器のことである。

これに続いて、「この日にあたりて、一切の聖衆、あるいは山間にありて禪定し、あるいは四道の果を得、あるいは樹下に経行し、あるいは六通自在にして声聞縁覚を教化し、あるいは十地の菩薩の大人にして、かりに比丘と現じて大衆の中にあるも、皆同じく一心に鉢和羅飯を受くれば、清淨戒を具する聖衆の道、その徳、汪洋た

らん」と説く。

文中の「鉢和羅飯」とは何であろうか。中村元『仏教語大辞典』³¹によると、「鉢和羅」は「はつわら」と読み、梵語 *pavāna* パーリ語 *pavāna* の音写で、自恣を意味する。雨安居の修了式のことであるとすると、その典拠は玄応の『一切経音義』である。

だが、この経典には「自恣」という語が四回用いられている。唯一ここで音写語を用いなければならない理由はない。『孟蘭盆経』には「鉢和羅飯を受くれば」とあるが、『報恩奉盆経』には「皆共に心を同じくして鉢和羅を受く」とあり、『経律異相』には「皆同一に鉢和羅を受け」とある。文脈から「鉢和羅」が自恣を意味するとは考えにくい。

宗密の『孟蘭盆経疏』には、「鉢和羅飯を受くるとは、鉢中の飯なり。梵には鉢多羅と云い、此れ応量器を云う。和字は訛なり。今時ただ鉢と云うは略なり。経題に盆と云うは即ち是れ鉢なり。訳するとき俗に随い、題はこれ盆と云う。盆これと鉢とは皆これ器ゆえに」とある。宗密は和字は訛だとして「鉢多羅」と解し、それは応量器すなわち修行僧が托鉢の時に用いる鉢の意味だとしている。これを選梵すれば、「パートラ (*putra*)」である。そしてそれは経題の「盆」と同じ器をさす言葉だと言っている。

7.

第三幕は、釈尊の教示にしたがって目連が衆僧に供養する場面である。

この経典の舞台は釈尊在世の時代の設定である。律蔵大品によれば、成道後の釈尊が鹿野苑での初転法輪の後、ウルヴェーラーに戻り、カッサパ三兄弟を屈服させ、マガダ国に入ってから舍利弗と目連を入門させた時点で千

二百五十人の弟子がいた。³³『法華経』の漢訳では「大比丘衆万二千人」、梵語原典では「千二百人」の弟子がいたとされる。いずれにしても千人を超える僧たちに存分のご馳走を振る舞えるだけの財力が出家者の目連にあったことが不思議でも何でもないことのように記されている。³⁴

ともかく、そこでどうなったかというところ、経には、「この時、目連その母、即ちこの日に一劫餓鬼の苦を脱するを得たり」とある。

この第三幕で、『盂蘭盆経』だけに「盂蘭盆」という語が三回出てくる。

(一)もし未来世の一切の仏弟子で、孝順を行ずる者は、またまさにこの盂蘭盆を奉じて現在の父母乃至七世の父母を救度すべきことしかるべし

(二)七月十五日の仏歡喜日、僧自恣の日に、百味の飲食を以て盂蘭盆の中に安じ、十方自恣の僧に施すべし

(三)年々、七月十五日、常に孝順慈憶をもつて所生の父母ないし七世の父母のために盂蘭盆を作り、仏及び僧に施し、以て父母長養慈愛の恩を報ずべし

念のために言うところ、この三方所の用例以外に「盂蘭盆」の典拠はなく、よってこの用例を検討する以外にこの語義を明らかにするすべはない。果たして、この原語が「倒懸」を意味する *ullambana* であるとか、「救済」を意味する *ullumpana* であるとか、「靈魂」を意味するイラン語の *urvan* であるとか、等々の説がいかに荒唐無稽であるか、ここにおのずと判明する。

経はさらに、「時に仏、十方の衆僧に勅したまわく、皆先ず施主家の為に、七世の父母を呪願し、禪定意を行じ、しかして後に食を受くべし」と述べ、「初めて盆を受くる時は、まず仏塔の前に安住し、衆僧呪願しておえて、すなわち食を受くべし」と、僧たちへの心得を記している。この文中の「仏塔」とは何かという問題はさておき、

「孟蘭盆を奉じ」「孟蘭盆の中に安じ」「孟蘭盆を作り」、そして「盆を受く」という表現からして、『孟蘭盆経』における「盆」とは、自恣の日に僧たちが受ける供物を載せる器（トレイ）以外のなものでもないことがわかる。

では、「孟蘭」とは何かということであるが、経の文脈から、「孟蘭盆」は盆器そのものをさす語としか考えられない。「孟蘭」は僧自恣という特別な日に捧げる盆器の美称としてつくられた語と考えるのが最も自然である。⁽³⁵⁾後世の人々がどんなに内外の文献を渉猟してもその典拠を見つけないことができなかったのは、「孟蘭」も「孟蘭盆」も、ひとえにこの名称の齋会を開催するために編み出された造語だったからである。

8.

さて、従来多くの学者が指摘してきたように、やはり『孟蘭盆経』は竺法護に仮託された偽経である可能性が高い。竺法護の時代の漢訳語を使うことによって、その時代に訳されたことを装うことも容易いことだからである。なによりも梵語原典のないことが致命的であるが、インド撰述の可能性は本当に全くないか一応検討しておきたい。

まず、『孟蘭盆経』のメインのモチーフである「僧自恣の日に仏僧に施し奉る」行事がインド起源であることは明かである。

玄奘は『大唐西域記』に、夏安居明けの行事の様子を次のように報告している。

歳毎に比丘安居を解くるとき四方の法俗百千万の衆、七日七夜、香花を持し音楽を鼓し遍く林中に遊びて持礼供養す。⁽³⁶⁾

義浄も『南海寄帰内法伝』に、安居明けに「この時、法俗盛んに供養を興す³⁷⁾」と報告し、自恣の日の賑やかな様を詳しく記している。

この日を応に随意と名づくべし。：旧に自恣と言うは是れ義翻なり。必ず須く十四日夜において一の経師を請じ、高座に昇らしめて仏の経を誦せしむべし。時に俗士雲のごとくに集まり、灯を燃やし明かりを続け香華が供養される。明朝は総べて出でて村城を旋繞し、各各並に虔心に諸の制底を礼拝す。：凡そ大斎の日は悉く是の如し³⁸⁾。

次に「目連が母を救い出す」モチーフは、根本説一切有部の説話集『デイヴィヤ・アヴァダーナ³⁹⁾』に見られる。ただそこでは母は餓鬼ではなく、摩利支世界から救い出される話になっている。この説話集の成立は十世紀頃と新しいが、同じ話が『根本説一切有部毘奈耶藥事⁴⁰⁾』に収められていて、古い伝承だと思われる。

目連が関係する餓鬼救済の話は古くからたくさんあり、特に『撰集百緣経』巻五の「餓鬼品」に収められている救済譚⁴¹⁾の大半に目連が登場する。原典は説一切有部が伝える『アヴァダーナ・シヤタカ』という名称で現存する⁴²⁾。このほか餓鬼救済の説話は、先述のパーリ小部經典『ペータヴァッツ（餓鬼事経）』のように枚挙に暇がないほどである。

また目連のような出家者が自らの父母や亡き縁者のために仏僧に寄進して功德を積むということは、インドでは古くからごく普通に頻繁に行われていたようである⁴³⁾。

このように、『盂蘭盆経』の一つ一つのモチーフは悉くインドに起源がある。だが、それらが合体したモチーフ、すなわち、七月十五日の僧自恣の日に仏僧に布施をすることによる功德によって亡き父母及び七世の父母が救われるという『盂蘭盆経』における最も重要なモチーフは、インドにはついぞなかった。この一点により、この経

がインド撰述である可能性は限りなく低いと言わねばならない。

この経に基づいて始まった孟蘭盆会が、もしただ単に「僧自恣の日に仏僧に施し奉る」だけの行事だったならば、孟蘭盆会が勅命によって行われるやいなや各地に広まり歳時記に記載される程の重要な年中行事として定着し、やがて日本にも伝わって日本を代表する民俗行事となったかどうか甚だ疑問である。

仏教が伝播した国や地域で盛んになった行事や思潮が常にインド由来のものとは限らないし、またインド由来のものでなくてはならない理由はない。とはいえ、仏教の正統性はたえずインド起源であることによって担保されてきた。『孟蘭盆経』の個々のモチーフは悉くインド起源であるからこそ、この経は正典として経録にも記載され、人々に重んじられてきたと言えよう。

9.

この経においてきわめて重要なポイントと考えられるのは、七月十五日という日付である。この日付は『報恩奉盆経』にも『経律異相』にも明記されているし、『孟蘭盆経』には「七月十五日の僧自恣の時に」「七月十五日の仏歡日」「年々七月十五日」と三回も念を押すかのように出てくる。

自恣とは安居の最終日に僧たちが各々自発的に修行を振り返って反省懺悔をすることであるが、もともと安居とは、パーリ律藏⁽⁴⁾によると、僧たちが雨期の三ヶ月間一定の場所に定住して修行に励むようにと釈尊によって定められた制度である。出家受戒後に過ごした安居の回数を「法臘」といい、これが出家者の教団内における唯一のキャリアとして重視されたことから、雨期のない地域に仏教が伝播しても、安居という名称の修行期間が設けられるようになった。また雨期がインドとずれる場合は、それぞれの地域の雨期に合わせて安居の期間が定めら

れた。例えば東南アジアのタイでは、二〇二二年の場合、七月六日に入安居日（カオパンサー）を迎え、十月十日が安居最終日（オークパンサー）で自恣の日となっている。なお、パンサーとは、安居を意味するパーリ語の「ヴァッサ」（vassa 原意は「雨期」）に由来する。

雨期のない中国では、安居の期間と自恣の日をいつに設定してもよかつたと思われるのだが、インドにおける安居の最終日は、中国の暦で七月十五日だった。⁽⁴⁵⁾ インドの暦の日付ではなく、中国の暦で七月十五日という日付がくどいほどに明記されているのは、この日を盂蘭盆会という仏教の行事を行う日にしようとする明確な意図があつたからではないかと考えられるのである。穿った見方をする、中国の暦における七月十五日が、偶々インドにおいて安居の最終日である自恣の日に該当することに着想を得て、『盂蘭盆経』という経典が編み出されたと言えなくもないのである。

古来、中国では、一月十五日を上元、七月十五日を中元、十月十五日を下元と称し、この三つは季節の三大節目として重視されてきた。それは南北朝（四三九〜五八九）の頃から道教の三官（天官・地官・水官）信仰と結びついて祭祀として確立していた。⁽⁴⁶⁾ 特に七月十五日は地府（地獄）の門が開き、死者の霊魂が赦されるという言葉伝えが民間に広まり、やがて中元節は鬼節（死者の日）と見做されるようになり今に至っている。

明代の謝肇淛の随筆集『五雜俎』には、「七月中元の日。これを盂蘭盆という、目連が餓鬼獄中から救つた因縁に因んで、一切の餓鬼に食を施す日である」という記述がある。⁽⁴⁷⁾

結局、中国において『盂蘭盆経』は古来の習俗として民間に根付いていた祖霊信仰の聖典となる素地があつたということになる。だが、視点を変えると、そうした古来の習俗を単に素朴な民間信仰の謂わば「迷信」ではなく、偉大な聖者ブツダの教えに基づく尊い営みであると教導するために、『盂蘭盆経』が生まれたとも考えられ

るのである。

10.

仏教は伝播した国や地域の古くからある信仰形態を決して粗末にしたり否定することなく、むしろ尊重して、守り、共存し、ときには融合して、その意味でたえず新しく意義深い伝統を形成してきた。そういう中で『孟蘭盆経』という經典が生まれ、孟蘭盆会という行事が継承されてきたのである。

わが国においても、仏法興隆の詔が出された推古天皇の時代に、いち早く灌仏会と同じ年に孟蘭盆会が催されたことは先に見たとおりである。

孟蘭盆会の根拠となる『孟蘭盆経』が斉明天皇の時代に勧講されたことも先に見た。その時代に孟蘭盆会が具体的にどのように行われたのかは不明であるが、日本人が『孟蘭盆経』を正確に理解していたことは、平安時代の説話集である『三宝絵』に『孟蘭盆経』の内容が過不足なく紹介されていること⁽⁴⁾からわかる。また江戸時代に編纂された百科事典である『和漢三才図会』にも、「孟蘭盆」の項のもとで、『翻訳名義集』を引いて、「孟蘭は西域の語で、倒懸という意味である。盆は食べ物を貯る器で、これに百味をならべ、それを三尊にたてまつり、大衆の恩光を仰ぎ、倒懸の窘急^(ゆきつまり)を救うのである」と述べ、『孟蘭盆経』を引いている。ここで「盆は食べ物を貯る器」と正確に理解している。

日本人は辛嶋が指摘したような誤解は全然してこなかったということである。辛嶋が世紀の発見であるかのよう論述した「孟蘭盆はご飯をいれた鉢」という解釈は、すでに江戸時代の常識だったのである。

日本人は三国伝来とされる『孟蘭盆経』を受容し、その内容を正確に理解し、この経に基づく孟蘭盆会を勤修

して今日に至るのであるが、その過程で、日本古来の習俗と融合する化学変化が起きた。

慶長年間の一六〇三年から一六〇四年にかけてイエズス会によって長崎で編纂され発行された『日葡辞書』の「盆 (bon)」の項目は二つある。「盂蘭盆 (Vrabon)」の項目もある⁴⁹⁾ので合わせて引用しておこう。

・ Bon ボン (盆) Futugui (ホトギ) 果物などを盛る木製の盆あるいは大平皿。

・ Bon ボン (盆) Zenchō (genius 異教徒) が「陰暦」七月の十四日か十五日に行なう、死者のための祭り。

その祭りの三日間、宵の口に蝋燭をとぼす

・ Vrabon ウラボン (盂蘭盆) Zenchō (genius 異教徒) が、亡くなった身内のために、寄進とか、その他の行事とかをするとともに祈願する。「陰暦」七月中の一定の期間。

二番目の「ボン」が、今でも私たちが常識的に知っている「お盆」である。「死者のための祭り」と書いてある。三番目の「ウラボン」も同じ意味である。盆とは、「死者のための祭り」であるとイエズス会の宣教師達は理解していたのである。

11.

現在世界人口の五十六%以上を占めるキリスト教やイスラム教が伝わる以前の世界各地の民族の宗教に共通している点は、先祖を尊び敬うことである。唯一絶対神以外のいかなるものを崇めてはならないとするキリスト教やイスラム教は、かつて世界中に伝播する過程で祖先崇拜を禁止してきたが、古くからある民族信仰を否定しきれなくて利用した例は多々ある。典型的な例がクリスマスである。イエスキリストの誕生日はいつかということはいまだに定説はないが、冬至を祝う民族の風習を利用して、ローマ帝国の時代に十二月二十五日をイエスキリ

ストの誕生日としたのである。

キリスト教には「諸聖人の祝日」がある。カトリック教会ですべての聖人と殉教者を記念する日とされている。古くは「万聖節」と呼ばれた。教会の典礼暦では十一月一日である。続く十一月二日は「死者の日」とされ、「万聖節」とも呼ばれる。これはアイルランドやケルトの風習を取り入れたものである。最近わが国でもいつの間にか流行り始めたハロウィーンの名称は「万聖節オールハロウズの前夜イヴ」に由来している⁽⁵⁾。

万聖節などというものは本来キリスト教とは相容れないはずである。だが、結局妥協して取り入れた。特にメキシコや中南米諸国では、古来のアステカの風習と習合し、万聖節の十一月一日と万聖節の二日を「死者の日」として、国を挙げて陽気に盛大に祭る。今なおこのような国や地域は世界各地にあり、そのすべてに共通していることは、年に一度死者を迎えて饗応することである。

それは日本のお盆と瓜二つである。世界各地に伝わるこうした習俗ないし行事が、一体いつからどこで始まり、どのように伝播したかということは不明である。祖先を尊び敬う感情に基づく人類共通の風習と言うべきかもしれない。

柳田國男は『先祖の話』に次のように書いている。

私の聴いているある武家の老主婦は、明治も中頃に近くなるまで、盆の魂祭りの日は黒の紋服を着て玄闕の式台に坐り、まるで生人に対するような改まった挨拶をした。まことに行き届かぬおもてなしでございましたのに、よう御逗留下さいました。また来年もお待ち申しますというような言葉を、もつと長く丁寧に述べられたということである。それに答えられるともうなずかれるとも、思っていたわけではあるまいが、おそらくこれが代々のこの家の作法で、今日の教育とはちがって、こう言えこう思えと教える代りに、自分で

直接に実行して見せられたのであろう。私などの家でも、もとは主人が袴をはいて、送り迎えに表の口まで出た。それを形式だの虚礼だのと言った人は、これが子供たちに昔を考えさせる機会だったということも忘れているのである。足洗い水といつて縁側に新しい盥たらい置き水を張り、または草履を揃えておくということなども、目的はややまた第二の点にあったのかも知れない。しかもたまたまは年とつた者などが、自分が孫であり祖父や祖母とともにいた日のことを憶い起し、さらにはまた今の孫たちの自分のようになる日を、想像してみるのも多くはこの際の事であった。^(註)

このように、わが国において、お盆は祖霊を鄭重に迎えて饗応し、最後に見送る行事なのである。「祖霊を死後の苦しみの世界から救済するための仏事」(『広辞苑』)ではないのである。

日本人は、『盂蘭盆経』の内容を咀嚼して、要は七月十五日に祖霊のために行うべきことを説いた経という受け止め方をした。そして、その「行うべきこと」として、古来習俗として日本中で様々なかたちで行われてきた祖霊を迎えて饗応し見送る一連の営み並びにその期間を「盂蘭盆」略して「お盆」と呼ぶことにしたのである。そのことにより、お盆は真正正銘の仏教行事と見做されるようになったのである。

お盆とはそういう意味の日本語である。漢語でも梵語でもなくイラン語でもない。経を誤解して用いているわけではなく、全く新しい意味づけをした和製の仏教用語だったのである。なお、お盆と関連して「おせがき」についても述べるべきであったが、それについては別の機会に譲りたい。

【追記】

密教儀礼としての様々な修法の次第は基本的に全体の流れとしては、本尊を最上の賓客と見立てて道場たる自

宅に招き入れ、饗応し、主客が肝胆相照らして存分に語り合ったのち鄭重に送り出すという形式になっている。古代インドの接客の作法が取り入れられたものとされるが、行法ではそれらをすべて象徴的な仕草によって行う。本稿で柳田國男の『先祖の話』を引用し、「このように、わが国において、お盆は祖霊を鄭重に迎えて饗応し、最後に見送る行事なのである」と書いたとき、この行事の形式は何かに似ていると感じていたのであるが、しいてそれを追究せずにいた。だが、初校の段階で、わが国における「お盆」の祖霊（≡ホトケ）に対する「迎え火」に始まり「送り火」に終わる一連の行事は、違いは期間の長さだけで、形式上は密教儀礼の修法の次第と全く同一であるとの確信が得られたので、ここに「追記」する次第である。

註

- (1) 戦後祝祭日を改訂するにあたって、昭和二十三年内閣府が世論調査したところ、国民の九九・九%が正月を一位に挙げ、二位は天皇誕生日、三位がお盆であった。だが、お盆は宗教行事ということで退けられた。春秋の彼岸の中日は、それぞれ六位七位であったが、「春分」「秋分」ということで採用された。
- (2) 『広辞苑』第七版（二〇一八年一月十二日初刷発行、岩波書店）。
- (3) 『大正新脩大藏經』第一六卷七七九頁上〜下 『仏説孟蘭盆經』以下、『孟蘭盆經』と略す。
- (4) Sishi KARASHIMA, *The Meaning of Yulanpen* 孟蘭盆: "Rice Bowl" on Paravāṇā Day (『創価大学国際仏教学高等研究所年報』第16号、二〇一三)。
- (5) 『大法輪』(二〇一三年十月号) 一八二〜一八九頁。
- (6) 『大正新脩大藏經』第五四卷五三五頁中。
- (7) 『大正新脩大藏經』第五四卷一一二頁下。
- (8) 岩本裕『地獄めぐりの文学』(仏教説話研究第四卷、開明書店、一九七九) 三四五頁。
- (9) 荻原雲来「孟蘭盆の原語に就いて」(『荻原雲来文集』一九三八) 九一九〜九二〇頁。
- (10) 岩本前掲書二四〇頁。
- (11) Nanjo Bunyu "Catalogue of Chinese Translation of the Buddhist Tripiṭaka" 1833, p.78.

- (12) 池田澄達「孟蘭盆経に就いて」〔宗教研究〕三一、一九二六。
- (13) 高楠順次郎「力の玄妙」〔ピタカ〕八一五、一九四〇。
- (14) 干渴龍祥「梵漢雜俎」〔智山学报〕第十二・第十三輯、一九六四。
- (15) 井本英一「孟蘭盆の諸問題」〔オリエント〕九一、一九六七。
- (16) 入澤崇「佛説孟蘭盆経成立考」〔仏教学研究〕45・46、一九九〇。
- (17) 田中文雄「孟蘭盆」語義解釈考」〔道教文化への展望―道教文化研究論集―〕一九九四、「孟蘭盆の信仰と習俗」〔豊山学报〕63、二〇二〇。
- (18) 藤本晃「功德はなぜ廻向できるの?」〔国書刊行会、二〇〇六〕二二―二四頁。
- (19) 『大正新脩大藏経』第四九卷六四頁上。
- (20) 『大正新脩大藏経』第五五卷四九四頁下。
- (21) 『大正新脩大藏経』第五五卷二八頁下。
- (22) 『大正新脩大藏経』第一四卷三五一頁上。
- (23) 『日本書紀』下(日本古典文学大系68 岩波書店、一九五五)一八七頁。
- (24) 『日本書紀』下(日本古典文学大系68 岩波書店、一九五五)三三〇頁。
- (25) 『日本書紀』下(日本古典文学大系68 岩波書店、一九五五)三四〇頁。
- (26) 『大正新脩大藏経』第一六卷七八〇頁上。
- (27) 『大正新脩大藏経』第五三卷七三頁下〜七四頁上。
- (28) 『荆楚歳時記』(東洋文庫、一九七八)一九六頁。
- (29) 藤本晃(訳著)『死者たちの物語―「餓鬼事経」和訳と解説』(国書刊行会、二〇〇七)。
- (30) 梶山雄一「さと」と「廻向」―大乘仏教の成立(講談社現代新書、一九八三)。梶山は「善業の功德は、これを他者にふり向けることができる、という觀念が、とくに大乘仏教において生じてきた。これを廻向という」(一五七頁)と述べ、功德の転換は、業も果も本質的には実がないとする空の思想に支えられているという。梶山は実は同書で『ペータ・ヴァットゥ』にも言及しているのだが、それも空の思想に支えられているのかどうかについて明言していない。
- (31) 中村元『仏教語大辞典』下巻(東京書籍、一九七五)一一二頁。
- (32) 『大正新脩大藏経』第三九卷五一頁上。
- (33) 『南伝大藏経』第三卷六一〜七六頁。
- (34) グレゴリー・シヨペン著小谷信千代訳『大乘仏教興起時代インドの僧院生活』(春秋社、二〇〇〇)によると、根本説一切有部律の文献では、ブツダやシャーリプトラやマウドガルヤーヤナは、極めて裕福な人として描かれている(二一九頁)。
- (35) 赤松孝章「孟蘭盆」考」〔高松大学紀要〕33、二〇〇〇)によると、『孟蘭盆経』以外の漢文典籍においても「孟」も

- 「盆」どちらも器物の意味で使用しており、布薩のときなどに飲食物や日用品を器物に盛り付けて布施する習慣があったこと、夏安居に浄器に食を盛って供養することが南北伝を問わず律蔵の各所に説かれている。また、『諸橋漢和辞典』によると、「蘭」について「蘭肴（＝芳しい料理）」「蘭儀（＝美しい容貌）」「蘭宮（＝美しい宮殿）」「蘭章（立派な文辞）」などのように「美しい」「清らかな」「立派な」といった形容詞として用いられる例は枚挙にいとまがないという。
- (36) 『大正新脩大藏經』第五一卷九一八頁中。
 (37) 『大正新脩大藏經』第五四卷二一七頁上。
 (38) 『大正新脩大藏經』第五四卷二一七頁中。
 (39) 平岡聡『ブッダが説く三世の物語―『ディヴィヤ・アヴァダーナ』全訳』（大蔵出版、二〇〇七）九一頁。
 (40) 『大正新脩大藏經』第二四卷一六頁上〜中。
 (41) 『大正新脩大藏經』第四卷二二二頁中〜二二八頁上。
 (42) 岩本前掲書一九五〜一九七頁。
 (43) ショベン前掲書一〇九〜一一五頁。
 (44) 『南伝大藏經』第三卷二四五頁以下。
 (45) インドの暦では五月十六日に雨安居に入り、八月十五日に雨安居を解くのだが、これを中国の暦に直せば、四月十六日に安居に入り、七月十五日に安居を解くことになる。玄奘は『大唐西域記』に記している（『大正新脩大藏經』第一五一卷九一八頁中）。
- (46) 吉岡義豊「中元孟蘭盆経と敦煌本中元玉京玄都大献経」（中野教授古稀記念論文集）高野山大学、一九六〇、二六一〜二八〇頁）。
- (47) 田中文雄「孟蘭盆の信仰と習俗」（前掲）一六頁。
 (48) 『三宝総』（東洋文庫五一三、平凡社）一五九頁。
 (49) 『邦訳日葡辞書』（岩波書店、一九八〇）七三二頁。
 (50) 『三宝総』（東洋文庫五一三、平凡社）一五九頁。
 (51) リサ・モートン著大久保庸子訳『ハロウィーンの文化誌』（原書房、二〇一四）。
- (52) 『柳田國男全集』13（ちくま文庫、一九九〇年）一五七頁。
- （キーワード）
 盆 孟蘭盆 孟蘭盆経 安居 自恣